

## 新しい評価法による評価 中間報告

### 1. はじめに

評価のあり方について、5月から、いくつかの指標を設け多角的に考察し SSH 事業で育成される資質能力について適切な評価ができるよう、主に次の7つのポイントをおき、調査・実施してきた。

- (1) レディネス調査（事前・事後評価）
- (2) P I S A 調査（5月・10月に1，2年実施）
- (3) アンケート調査（各事業や教科ごと 自己評価・自己分析）
- (4) 各教科科目4観点11項目に則った評価
- (5) ルーブリックによる調査（課題研究に関する評価）
- (6) 生徒同士による課題研究のポスター評価（2，3年生評価）
- (7) 教員による課題研究のポスター評価

### 2. SSH 評価報告

#### (1) レディネス調査

##### ア 概要

1年生抽出2クラスを対象に、自然科学への知識や興味・関心についてのアンケート調査を実施した。目的は、1年次当初に自然科学についてどの程度の知識・興味・関心を持っているかを調べ、SSH事業を進めていく上での前提条件を明確にするとともに、学校設定科目など多くの事業実施後に生徒の変容を捉えることである。1回目を1年入学後の5月に実施し、2回目を10月に実施した。2回とも同一の質問用紙を使用した。

##### イ 結果と分析

SSH事業部の教員が選んだサイエンスの『知識』に関する50単語を知っているかどうか聞いたところ、5月から10月の間に「知らない」が減少し、「聞いたことがある」と「説明できる」が微増した。『興味』に関しても同じように調査したところ、こちらは興味・関心が増加したとは必ずしもいえない結果となった。

#### (2) SSH事前事後アンケート調査の結果と分析

平成27年度のアンケート項目と大きく変えず、平成28年度についても5月10月にアンケート調査を行った。平成28年度の結果から分かることは、大学・企業の科学技術、最先端技術が活用される場面については、知っている・どちらかといえば知っているが増加し、一定の事業効果が認められる。ただし、後半の設問から積極性が高まったとはいえない結果であった。

### (3) PISA調査

#### ア 概要

客観的な視点の必要性を感じ、PISA テストの導入を行った。活用型の資質・能力について、初期（1年次当初）からSSH事業や課題研究に関わったのち（2年次終了時）にかけて、どの程度正答率に変化があるか調査した。

#### ○実施問題

読解力—PISA 調査「携帯電話の安全性」改題

数学リテラシー—PISA 調査「回転ドア」「テストの点数」

科学リテラシー—PISA 調査「遺伝子組み換え作物」「温室効果」

#### ○実施時期・時間

5月11月に1，2年抽出クラス 20分程度で実施

#### イ 結果と分析

1年よりも2年のほうが11月に関しては良い結果が出ている。このことは、学年進行で伸びていることが見て取れる。ただ、5月と11月の調査結果から、抽出クラス2クラスずつで実施したものの、半年間の教育によって活用型の資質・能力が育成される授業形態だとは必ずしも述べられない結果となった。また、特定のクラスのリテラシーに関する調査で、空欄が目立ち、調査で意図した生徒の取り組みが行われなかったことも今後の課題として上げられる。

### (4) その他の調査

各教科科目4観点11項目に則った評価に関しては、各教科・科目で分析していただいているところである。また、各事業アンケートに関する調査、ルーブリックによる調査（課題研究に関する評価）、生徒同士による課題研究のポスター評価（2，3年生評価）、教員による課題研究のポスター評価はSSH成果発表会のものを分析中である。